

# 同音衝突の基本といろいろ 大西拓一郎

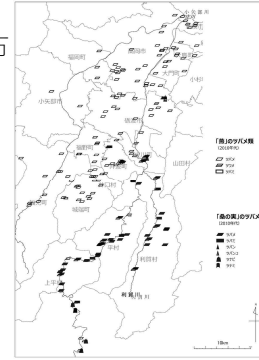
## 1. はじめに

- 言語地理学における「同音衝突」の定義  
「同音異義語が地理的相補分布を示すこと」  
(馬瀬1979、小林1981)  
モデル図(右)：Pは語形、(x)(y)は意味。
- 再定義の提唱  
「同音異義語の地理的に隣接して現れること」
- 形成過程
  - 従来の考え：同音異義語になる直前の拡大停止
  - 今回のとらえ直し：多様な変化過程がある。  
語彙変化のダイナミズム

P(x)
P(y)

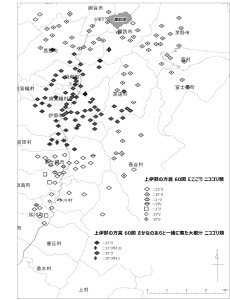
## 2. I型：地理的相補分布

- 富山県庄川流域における「桑の実」と「燕」のツバメ
- 上流域の五箇山では「桑の実」がツバメに変化してこの地域の「燕」はツバクラなのでホモニム化しない。  
中下流域では「燕」はツバメなので、ホモニム化を避けてツバメには変換できない。



## 3. II型:同音異義語発生とIII型:語彙崩壊

- 天竜川上流の上伊那地方では「魚のあらと一緒に煮た大根汁」(以下、「大根汁」)をニコゴリと言うようになり、「にこごり」とホモニム化(馬瀬1979、1980a)。  
→II型(後述するように正確にはIIa型)
- 「にこごり」は語としての独立性を消失(馬瀬1979)  
→III型
- ホモニム化を起こすと「相補分布」ではなくなる。
- 「大根汁」がニコゴリ化するの、安室(2022:236、245)のコツニ相当の\*ニコツの存在を想定してどうか。\*ニコツが類形のニコゴリとホモニム化する(II型)。その後、ついに語彙崩壊を起こした(III型)と推定。

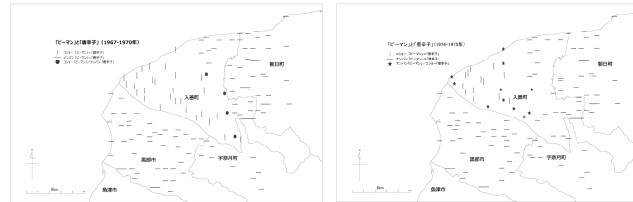


## 4. I II III各型のモデル化

I ツバメ(桑の実) ツバクラ(燕)	II ニコゴリ(にこごり) アラニ(大根汁)	III ニコゴリ(にこごり) φ(にこごり) ニコゴリ(大根汁)
I P(x) Q(y)	II P(x) Q(y)	III P(x) Q(y)
P(y) R(x)	P(x, y)	φ(x) P(y)

- 同音衝突は多様
- 変化は、I→II→IIIのような一方向性を持たない。逆行も起こる。

## 5. 富山県下新川地方における「唐辛子」と「ピーマン」一極短期間の変化



永瀬(1977a、1977b)に示されている分布を見ると、富山県下新川地方では、「唐辛子」と「ピーマン」が極短期間(4~8年)でダイナミックに変化した。  
【左図】は1960年代末、【右図】は1970年代初頭。いずれも原論文をもとに作図した。

## 6. IIa型とIIb型

- 「唐辛子」は南米原産で、近世にヨーロッパ経由で日本にもたらされた渡来作物(山本2010、2016、佐藤1977)。
- 「ピーマン」は比較的古くから日本に入っていたものの(農林省統計調査部1951)、一般家庭に普及するのは1960年代以降(講談社2013:83)。
- 下新川の調査時期はピーマンの普及初期。
- 「唐辛子」「ピーマン」の区別がないホモニムが初期状態。  
近隣で使われている「唐辛子」の語形を「ピーマン」にあてがひ、両者を区別するようになる。
- II型：接するいずれかがホモニム状態
- IIa型  
伊那諏訪の「大根汁」「にこごり」のニコゴリのように複数語がマージしてホモニム化するII型をIIa型とする。
- IIb型  
下新川の「唐辛子」「ピーマン」のようにホモニムが分岐するII型をIIb型とする。

## 7. 下新川のモデル—ふたつの同音異義語

1960年代 IIb α コショウ(ピーマン) ナンバ(唐辛子)	IIb' β コショウ(ピーマン) ナンバ(唐辛子)	1970年代 IIb α コショウ(唐辛子) ナンバ(ピーマン)	IIb' β コショウ(唐辛子) ナンバ(ピーマン)
P(x) Q(y)	P(x) Q(y)	P(y) Q(x)	Q(x) P(y)
Q(x, y)	P(x, y)	P(x, y)	Q(x, y)

- ホモニム状態が2種ある。  
ナンバ(ピーマン、唐辛子)  
コショウ(ピーマン、唐辛子)
- 新作物の「ピーマン」に近隣の方言をあてて、区別を生み出す。
- IIbのαは、IIb'のホモニムから語形を得て、新作物の「ピーマン」にあてがひ、IIbのβ状態に移行して、両者を区別する。
- II型は統合/分岐のいずれの可能性もある。  
従来はIIaを中心にとらえられてきたが、IIbのようにホモニム統合から区別の発生もある。

## 8. むすび

- 同音衝突は、地理的相補分布だけで定義した場合、関連する多くの言語変化がこぼれ落ちてしまう。
- 現実の同音衝突は多様である。
- 「同音異義語の方言分布が意味の異なりにより隣接して現れること」と再定義することで多様な変化を射程に入れられる。
- 同音衝突
  - I型：地理的相補分布
  - IIa型：統合による同音異義語の発生
  - IIb型：分岐による区別の発生
  - III型：同音異義語から語彙崩壊
- II型のabのように統合・分岐の両方向が可能であり、各型は一方向性を必ずしも有さない。

## 文献

講談社編(2013)『からだにやさしい旬の食材 野菜の本』講談社  
 小林隆(1981)「同音衝突の意味的側面：高田西部言語地図を中心に」『国語学』126、1-12。  
 佐藤英一(1977)「物の伝来と名称の伝播—渡来作物をめぐって—」『言語生活』312、40-48。  
 永瀬治郎(1977a)「標準語形と方言形」『日本方言研究会第24回発表原稿集』52-60。  
 永瀬治郎(1977b)「下新川の2つの分布図」『国語学研究』17、1-11。  
 農林省統計調査部編(1951)『農作物の地方名』農林統計協会  
 馬瀬良雄(1979)「同音衝突—相補分布との関連で—」『国語学』119、41-56。(馬瀬良雄(1992:55-77)に再録。)  
 馬瀬良雄(1980a)『上伊那の方言』伊那：上伊那誌刊行会。  
 馬瀬良雄(1980b)『神主の方言をめぐる虫たち』佐藤茂教授退官記念論集刊行会編『佐藤茂教授退官記念論集国語学』611-629。東京：桜楓社。(馬瀬良雄(1992:95-112)に再録。)  
 馬瀬良雄(1992)『言語地理学研究』。東京：桜楓社。  
 安室知(2022)『日本民俗分布論—民俗地図のリテラシー—』東京：慶友社  
 山本紀夫(2010)『トウガラシ讃歌』(八坂書房)  
 山本紀夫(2016)『トウガラシの世界史』(中公新書)